

千葉大学は、グローバル社会を生き抜く人材育成をめざして、教養教育の充実など国際化を進めてきました。2016年には国際教養学部を新設し、20年からは、国立大学で初めて全学で在学中の留学を必修化します。

グローバル化への対応は教員養成においても重要です。本学では、12年から海外の学校に学生を派遣し、現地の高校生に対して英語で授業をする「TWINCLE」というプログラムを実施しています。いわば「海外での教育実習」です。新学習指導要領で小学校に教科としての英語が導入されるのに加え、この先学校には日本語を母語としない子どもたちが増えるでしょう。その際、英語をコミュニケーションツールとして使う力は不可欠です。

キャンパス内の環境も学生たちの成長に影響を与えています。附属小・中学校が教育学部棟の隣にあり、常に身近に子どもたちがいます。毎年、学部新入生が附属小1年生を連れてキャンパスを案内するのが伝統で、入学してすぐに子どもたちと接することで、教員への自覚が芽生えています。

この自覚をさらに育てるためには、大学と附属学校のより緊密な連携が必要です。そこで、16年度から、これまで教育委員会から派遣されていた附属学校教員の一部を大学で選考し、将来は「教育学部特命准教授」などとなって大学の授業を担当する予定です。医学部では、大学教員が附属病院の医師を兼務し、研修生も指導するのと同様に、教育学部の教員が附属学校でも教え、実習生の指導もする。一方で、附属学校教員も大学で学生指導にあたる。学校現場と研究の世界を行き来する「往還型教育」の実現が重要だと考えています。

総合大学である本学には、価値観が異なる多様な人がおり、クラブ活動などを通してその価値観に触れ、議論できる環境があります。私自身、学生時代にヨット部で活動しましたが、研究者の道に進むきっかけになる留学先の教授との出会いは、来日した先生をヨットに乗せたことでした。学生たちが、この環境を生かして自らの長所を見つけ、教育現場に飛び立ってくれることを願っています。



学長が語る  
vol.7  
千葉大学編

## 国立大学初の留学必修化 多様な価値観認め合う教員に

千葉大学長  
徳久剛史さん

グローバル化が進む中、これからの学校教育を担う学生が大学でどんな経験を積めるかは、ますます重要になっている。国立総合大学として、初めて全学生の留学必修化を打ち出すなど、先進的などりくみを進めている千葉大学の徳久学長にお話を伺った。



### Profile

1948年生まれ。73年千葉大学医学部卒業。同大医学部第二内科を経て、80年同大大学院医学研究科博士課程修了。大学院在学中にスタンフォード大学医学部、助手時にケルン大学附属遺伝学研究所に留学。神戸大学医学部教授、千葉大学医学部教授を経て、医学研究院長・医学部長、理事等を歴任し、2014年から現職。